

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して（二八二）

文・出水 康生

戦国おもしろ百話

戦国三好一族、三好長慶の学術的大展開

——『石谷家文書』『戦国遺文・三好氏編三卷』『三好一族と織田信長』等の発刊——

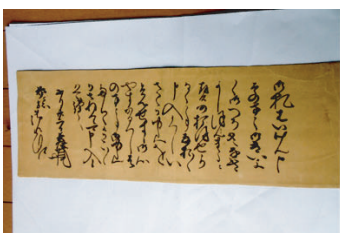
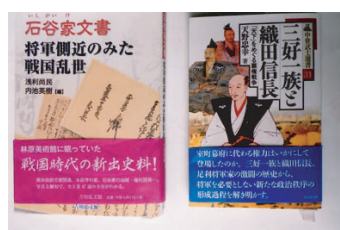
「二次史料」を目に

明治以来の国家的事業として史料編纂所から逐次刊行される『大日本史料』の

第九編の画期が室町時代末期（一五〇八―一五六八）とされたために二四冊で「堺幕府」（一五二七―三二）の前によりやくに到達。それで戦国三好一族・三好長慶の学術的な研究や活躍の記述が戦記物などの二次史料によって行われて来た。それで江戸時代の中後期の意図的な編著によって「戦

国」の下剋上の悪者・梟雄」の悪評が生み出され、再生産された。

天野忠幸（関西大学非常勤講師）さんの精励によって『戦国遺文・三好氏編』が東京堂出版から第一巻（二〇一三・十一・二〇）、第二巻（二〇一四・十一・三〇）、第三巻（二〇一五・十一・一五）が刊行されて、三好氏の関連資料が寛正六（一四六五）年から寛永十六（一六三六）年までの二一四通、参考資料一六三通が収録された。



その三巻から最も単純明快な戦国三好一族の「禁制」発布の状況を抽出して一覽を作成してみると、大永七（一五二七）年の三好宗三・三好長家が大山崎惣中へのものを最初として天正一〇（一五八二）年六月の三好（織田）信孝の大和法隆寺へのものまで一六一一通で、その時代ごとの一族の威勢と「天下」とされた京畿での展開が目瞭然となる。三好長慶のものが天文八（一五三九）年から永禄七（一五六四）年四月のものまで五一通を最多として「天下人」の威勢を示している。「禁制」とは「味方の軍勢による乱暴狼藉や放火など不法な行動を禁止し地域や寺社の安全を保障する文書」のことである。

『石谷家文書』の三好長慶書状

「びっくりぎょうてん」する出会いが人と人であったり、新しい事物や新知見であっても、それを感激して受容できることを「飢えた魂」の充足、「若さ」の象徴とできることは嬉しいことである。知的な好奇心を燃やして教養のために「狂様」で各種の講演会・集会に時々顔を出す。昨年十一月三日に徳島市立徳島城博物館での「中国国分／四国国分―秀吉の天下取りと智将・蜂須賀正勝―」展の高度な展示を、大河ドラマ「軍師・官兵衛」で、蜂須賀小六正勝の臨終の場面で秀吉を号泣させた演出に、ようやくこれまでの「野盗上り」の粗野な人物像から豊臣秀吉を天下人に出世させる第一の功臣、最初の大名として龍野に封ぜられたことが認識されるようになったことに「納得」としたうえに、第一次・第二次の史資料の展示を見学・視察・観察させてもらった。その後、岡山県立博物館の内池英樹さんの「石谷家文書から見る四国平定戦」のプロジェクト映画と講話の現代的な講演を拝聴した。それで「石谷家文書」が前年の六月二三日に岡山市の林

原美術館と県立博物館が新発見史料について記者会見発表して十三社三〇人の記者が参加して翌日に「朝日」毎日」を始め共同通信による全国各紙に大々的に「本能寺の変、カギは四国にあり？光秀の動機に迫る手紙岡山で発見」信長に恭順示す書状―長宗我部氏「本能寺」直前に「本能寺の変直前信長に従う意向―長宗我部元親の手紙発見」などと報じられた。それで、その石谷家の文書は本能寺の変に関わる長宗我部元親の明智光秀・斎藤利三への手紙であったものと認識していた。それが記者会見に例示された五点の文書は二点が長宗我部元親書状、一点が稲葉一鉄・一点が三好長慶書状、一点が十河一存書状であったのに、本能寺の変に関わる元親書状だけが時事トピックスとして報道され、石谷家文書の三巻四七点の文書では天文期の三好長慶が重視されて象牙軸の卷子とされていたことなどは全く無視されてしまっていたのである。そのことを聞いて「びっくりぎょうてん」、二冊だけ残っていますとのことで早速『石谷家文書―將軍側近のみた戦国乱世』



『武家手鑑』『戦国遺文』に
収録された三好長慶書状

(吉川弘文館、二〇一五・六・一〇刊、一八〇〇円)を購入して、一次史料としての四七点を写真版・解読・解説をしての懇切なものであることに敬服。そこに、戦国三好一族の天下取りに関わる三好長慶書状五点・十河一存書状一点・それに関連する福家長頼・細川信良・真木島昭光書状などが掲載されている。元親書状の重大性を意識しての用意周到な配慮を知り、元親書状が本能寺の変直前の阿波の諸城を戦場としての国分け処分の具体的な策略が明白に記録されているのである。

石谷家文書四七点は①長宗我部元親関係②本能寺変前後のもの③その他戦国武将や石谷家の由緒・権利関係のものと分類される。③に含まれる三好長慶書状が、天下人として京畿を支配して、文書の当事者である石谷家の生活基盤となる京都周辺に持つ塩合屋の公事(年貢以外の雑税)の徴収保証をし、石谷家の荘園百姓の年貢・公事未納に対して督促するものである。この書状が『石谷家文書』では年代比定がされていないが『戦国遺文・三好氏編』第三卷で、それまでの研究体験から「天文二十一年カ」とのように明示して収録し、中島重房・忠秀書状なども「参考」として収録されている。このようにまだ一年に足らぬうちに、戦国三好一族・三好長慶に関する一次史料が発見・公開され、それが写真版・解読活字化されて活用することができる。天野忠幸『三好一族と織田信長』(戒光祥出版・二〇一六・一・二〇刊、二五〇〇円)が刊行され、それに活用されている、素晴らしいことだ、として、誇るべき故郷の歴史の再認識に努力しなければならない。

石谷家は美濃土岐氏の出身で室町將軍の側近の奉公衆で、奉公衆とは御家人のうちお目見以上の直勤御家人とされるので、当時の石谷光政(生没年不詳)頼辰(？・五八六)の父子が足利義輝・義栄・義昭の三代の奉公衆として、三好長慶・織田信長・豊臣秀吉の三氏の時代の「戦国乱世」を見て、その中で生活していた。その当時の人間関係・情報交換を如実に証明する一次史料の発見・公開という事で、びっくりなのである。

さらにまた、 びっくりぎょうてん

三好長慶書状を写真・活字で一次史料として目に出るようになったことに、びっくりしたいたら、さらにまた三好長慶書状の「現物」を手にする事になった。びっくりぎょうてん。正真正銘に東條英機の名を昭和十八年に時の総理大臣の名から東條姓に命名された東條英機さんとの出会いから再々にびっくりする快挙が実現して来た。今度も前述のような戦国三好一族・三好長慶の学術的な大展開の動向に乗るように、得意のITによる「ヤフーオー

クション」に出品された、三好長慶から妹婿である芥川孫十郎宛の書状をその名の持つ豪快さ・一徹さ・決断力によって競り落として「現物」を目にし手にすることになった。それが写真であり、その真贋・解読、その由来に知恵を絞る。わが古文書解読力で六割方は文字化できても合格点に達せず意味不詳として探求。東條さんはITで検索して加賀藩前田家の五代松雲公綱紀(一六四三・一七二四)が収集した平忠盛・清盛書状から前田利常書状までの有名人書状一五〇通を尊経閣文庫に所蔵し、それを上中下各五〇通に分類して前田育徳会・尊経閣文庫の編刊で発刊されたものの復刻が臨川書店から昭和五三年にされていることを突きとめ、復刻と言えども豪華・高額・大部の『武家手鑑』を購入され、その「中ノ四八」に収録され、別本の『尊経閣文庫蔵武家手鑑・解題・釋文』で解読されている。小生も『戦国遺文・三好氏編』を操り、その第一巻一三四頁の「三六七号三好長慶書状(切紙)」、尊経閣文庫所蔵武家手鑑」として収録されているのを発見、さ

すがに、としながら、発見前に天野忠幸さんに写真を送って返事を求めた返事に「尊経閣文庫に所蔵されているはずなので」とされた。はてさて？？としながら高槻の芥川山城に妹婿の三好一族として城主であり、長慶の天下取りに協力しながら最後に長慶に謀き、阿波に三好実休を頼って逃れて消息を絶つ芥川孫十郎の跡を追う。福井壘(阿南市福井町)に「シダの丸」の紋所の芥川殿・芥川兵庫宗員の存在が知られ、さらには以前に野田靖之さんと共に調査した石井町の芥川典史さんも紋を同じくされる。これは面白いことになるぞ、と東條英機さんと共ににやにやとする。

三好長慶の芥川孫十郎宛の書状の解読は次の通りである。「御礼はいけん申候、その方々御き、いよいよ御へちきなきよし、ほんもうに存候、仍おほせらるる事、なおなお申入候へく候、いささかゆたんをそんせす候、御心やすかるへく候、その方々事、御ゆたん候ましく候、かたかたかさねて可申入候、恐々謹言、(年末詳)正月二十二日、芥孫 長慶(花押)御返報」